

めだか談義

メダカ発、世の中つれづれの記。2026・01・18



「めだか米」のHPに登場している赤松央理くん。何ともいい顔をしていますね。こんな笑顔を見せられたら農家さんは嬉しいことでしょうね。この写真をあらためて見て、1年ほど前の小田原市広報の加藤市長のコラム、「生存の基盤確保を」を思い出しています。都市化の進展や農家の高齢化などの複合的な要因が絡み合い、市内の経営耕地面積が減少し、遊休農地が増えていることなどから「生存」の基盤となる「農」の、そして「食」の確保が脅かされるという現実を切実に訴えていました。「食のインフラ」ともいえる米までもが足りなくなっている現実とどう向き合えばいいのでしょうか。放置されている農地を生産の現場に戻すにはどうしたら良いのでしょうか。よく聞かれる話では「農業を志す若者が増えている」「どこどこは若い世代の移住を大歓迎している」などなど、未来は捨てたものではないという風潮もあるようですが、本当にそうでしょうか。有楽町の交通会館にある「全国移住促進センター」で話を聞いたことがあるのですが、「確かに農業に関心を持つ若い人は増えています。ただ、現実とはそれほどバラ色ではなく、飛び込んではみたけど長続きしないケースは多い」という声も聞きました。これは神奈川への移住の相談に乗るブースから聞こえてきたものです。移住者への保障の問題や想像以上の肉体労働への負担などボタンの掛け違いはいくらでもあるようなのです。相当な覚悟を持って臨まないといけないわけですね。



最近、いろいろな会合で知り合う若者たちのグループがあり、どこも社会課題に取り組む目標を掲げていて大変に聞こえが良く、サポーターの会の活動にも関心を示すのですが、さて参加をしてくれるのかと期待すると、裏切られることが2つほど続きました。いつのまにやら返信も来なくなる、なにかベンチャー企業のように、立ち上がりも早いが去る時も早い、という感じです。地に足がついていない集団が多いのが事実なのですね。

「自然共生サイト」の認定を環境省から受けた「おだわらめだかの郷」のこれからの課題のひとつが多発する休耕田、耕作放棄地の復活に誰が立ち向かえるのか、という問題です。「おだわら農人めだかの郷」が今までは引き受けてきたわけですが、若手メンバーは増えてきているとはいえ、主要な皆さんは高齢化、人手としては当然足りなくなっているという現実があります。となると、地元からという限定をせずに広く農業に従事したいという若い人たちを受け入れていかねばなりません。

どうでしょうか、小田原市は徴兵制ならぬ「徴農制」を導入してみても、なんていう乱暴な考えがアタマをよぎります。全国の自治体の先頭を切って、20歳になったら例えば半年間は農業に従事する、もちろんアルバイトとしての報酬は市が負担する。賛否両論が集中するでしょうが、「良く決断した」という意見も少なからずあるような期待もあります。卒業後の進路に農業を選択する若者も増えてくれるのではないかと目論見もあるのですが、「北の国から」の倉本聰は、富良野塾の塾生に農業労働を義務づけました。「食うためにに何が必要か」を自覚させるためでした。富良野塾の徴農制としてこれはよく知られたルールでした。「生きる」ためには「土」と格闘しなければならないという倉本聰の一貫した哲学がそこにはありました。

私たちの国の食料自給率の低さを考えると、一次産業への従事者数を大きく回復しなければなりません。都市化優先で、みんなが汗を流すことを敬遠してしまった、おかしい国。

ジムではなく、田んぼでカラダを鍛えようよ、若者諸君。